

「消化器外科病理学」

森 岡 恭 彦 監修
森 亘

東北大学教授

松 野 正 紀

日常の診療に際し、臨床と病理との関連性は極めて深いものである。殊に外科領域における病理の立場は質的診断のみでなく、治療面でも手術術式の選択や手術後の様々な治療方針を決定するうえで重要な位置を占めている。本書の序文にも述べられているように、このような密接な関係にある外科と病理を結ぶ“外科病理学 surgical pathology”としての成書は欧米では古くから Ackermann や Silverberg らの著書があって、わが国でも今なお広く愛読されている。わが国においても、過去において幾つかの本が発刊されているが、外科医と病理学者との綿密な連絡に基づいて編集されたものは少なく、それぞれの部門のアトラス的内容のものが多かった。また、日常診療で最も多い消化器疾患のみを対象とした詳細な外科病理学の発刊はほ

とんどなかったといつてよい。

本書を手にして、まず感ずることは、求めていたものがようやく現われたという感激に近い喜びである。消化器疾患の外科病理学書となると、豊富な臨床例の蓄積と臨床病理に目を向けた優れた病理学者の存在が不可欠であり、森岡、森両先生の監修によってはじめて成しえたものと思われる。とりわけ、東京大学第1外科には病理学に造詣の深い方々が多く、執筆陣に加わった外科医が臨床と病理の掛け橋となって、本書の内容に厚みを持たせている。

本書の特徴は、(1) 執筆陣の豊富な症例に基づいた記述である、(2) 各疾患の病因、組織発生、臨床像、治療成績、予後について系統的に簡潔に述べられている、(3) 写真が豊富で肉眼所見と組織学的所見を同一頁に並べて対比できるように

工夫してあり、極めて理解しやすいことなどが挙げられる。特に病理学書の生命であるマクロとミクロの写真の扱いに関しては、その大きさを統一しながら、可能な限り大きなサイズを採用して読者の理解を増すように心掛けている。また、写真は極めて鮮明なものばかりで、濃度も厳密に調整されており、当然のこととは言え、多くの病理学者の篩にかけられた厳選されたものであることがすぐわかる。写真はすべて白黒であるが、これはこの種の成書としては読者が求めやすい価格に抑えるための編者の配慮と理解したい。摘出標本写真などは一部カラーのほうが良いと思われる部分もあるが、各写真のシャープさはそれを補って余りある。

本書は幅広い読者層を対象に企画されたものであるが、簡潔な記述の中に高度な内容を盛り込んであって、ハイレベルの専門書となっている。若い外科医はもとより、消化器外科専門医や臨床病理に関与する方々に必携の書となるものと期待している。

まずは、待望の書が上梓されたことを、消化器外科学に携わる方々と共に喜びたい。

B5判 546頁 図107 写真805
1989 定価16,480円(税込) 〒400

医学書院 刊